

翻刻「経済学と心理学との関係を論ず。」

松 本 陸 杜

〈解題〉

江戸川乱歩は「二十代の私」(『二十代』一九五二年二月)で、次のように述べている¹⁾。

私は大正三年十月に満二十歳になっていた。早稲田大学政治経済科の大学部二年であった。貧乏だったので、半ばアルバイトをやりながら、大正五年満二十一歳の終りに近く同校を卒業した。政治学にはあまり興味がなかったが、経済原論の「欲望」とか「価値」とかという部分が面白く、その方面の学者になりたかった。

探偵小説作家として知られる乱歩の学生時代の夢が経済学者であったということはあまり触れられることのない事実である。だが、そのような夢を抱くほどに、乱歩は熱心に研究に取り組んでいたのであった。

この夢は金銭的な事情を主として諦めざるを得ず、早稲田大学を卒業後、乱歩は同郷の代議士であった川崎克の世話により、大阪府の貿易商社加藤洋行に就職した。しかしながら、その決断は「学問ノ夢」(『貼雑年譜』)として、乱歩を生涯苦しめ続けることになった。よく知られている乱歩の転職癖の理由の一端にもこの「学問ノ夢」があったという。

もともと乱歩が早稲田大学政治経済学科に編入学したのは、『『武俠世界』流の政治家的野心に燃えていて、政治の

勉強をする為に、そして又『武俠世界』流の苦学力行²をし、政治家になることを志してのことであつた。早稲田大学に編入学したのも、影響を受けたと語る『武俠世界』の記者押川春浪と河岡嘲風が、ともに同校の卒業生であつたからかもしれない。

しかしながら、予科を終える頃には政治への関心が少なくなつていたこと、「大学部一年同人雑誌『白虹』ヲ出シハジメタ頃カラ私ハ経済原論、殊ニソノ初メノ方ノ人間研究ノ部分ニ興味ヲ持」つていたことから³、乱歩は本科に進級した後は、政治学ではなく経済学を学ぶ道を選択した。経済学専攻の同級には、後に早稲田大学教授を務めた経済学者出井盛之が、政治学専攻の同級にも同じく後に早稲田大学教授を務めた法学者中野登美雄がいたという⁴。

この同人雑誌『白虹』について、乱歩は「廻覧雑誌『白虹』ノコト」(『貼雑年譜』東京創元社、二〇〇一年)に詳述している。『白虹』は、乱歩が上京してきた母方の祖母本堂つまと弟の通の三人で牛込喜久井町に暮らしていた頃に、大学のクラスメイト数名とともに刊行していた。原稿用紙を綴じた肉筆雑誌であり、一九一四年二月から約一年の間に五冊程度刊行したという。このような雑誌の形態上、『白虹』はクラスメイトや知人間で読まれる程度であつ

たと推測される。

「早稲田大学在学中ノ文反古類目録抄」(『貼雑年譜』)には、乱歩は『白虹』に、経済学に関する論考「経済学上の慾望の研究」と翻訳「経済学と心理学の關係を論ず」を發表。その他に、幻想小品「夢の神秘」と叙事詩「オルレアンの少女」を發表したと記されている。『白虹』は政治経済学科のクラスメイトと刊行していた同人雑誌ではあつたものの、内容は経済学に限定しない自由度の高いものであつたことがうかがえる。

今回紹介する「経済学と心理学との關係を論ず」は、先目の目録では「大学時代」ノ袋ニアリ」とされていたが、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料の内「ECONOMICS」と書かれた封筒に収録されている。「ECONOMICS」とあるものの、この封筒には経済学に関する資料以外にも学生時代の作文や試験問題など大学時代の主に学業に関する資料がまとめて収録されており、資料の内容は経済学に限定しない。乱歩の経済学研究の内容は、随筆等には殆ど示されておらず、従来研究の対象にされることも少なく未だ謎に包まれた部分が多い。「経済学と心理学との關係を論ず」は、乱歩が学生時代どのような経済学を学び、研究していたのか。その実態を知るための手が

かりとなる重要な資料として位置づけられる。

原稿の終わりにも書かれているように、「経済学と心理学との関係を論ず。」は乱歩のオリジナルの論考ではなく、Palgrave の Dictionary of Political Economy 第三巻に掲載されている Political Economy の中の第五項目 Political Economy and Psychology の翻訳である。Dictionary of Political Economy は一八四三年に Daniel Macmillan と Alexandre Macmillan の兄弟によって設立されたイギリスの総合出版社 The Macmillan Company から刊行された、全三巻の経済学に関する辞書である。第三巻の初版は一八九九年であるが、その後一九〇一年に再版され、一九〇八年には改訂版が刊行されている。更に一九二六年には新版が刊行されていることから、乱歩が読んだ当時、既に一定以上の権威のある辞書であったと推測される。

概ね原典に忠実に翻訳されているが、例えば題名の Political Economy and Psychology が、直訳すれば「経済学と心理学」となるところを、乱歩は内容を踏まえて「経済学と心理学の関係を論ず。」と翻訳している。また、哲学者 Boethius については、原典には記されていないが「簡潔なプロフィールを加筆している（『その哲学の有名な著書』とは、代表作である『哲学の慰め』を指していると考えら

れる。以上のことから、乱歩は単に原典を翻訳するにとどまらず、『白虹』に発表することを意識し、読者の理解を促すための工夫を施していた様子が確認できる。

原典の執筆者はイギリスの経済学者 Philip Henry Wicksteed（以下、ウィックスティード）。経済学者としてだけではなく牧師、神学者、文芸批評家としても活動していた人物である。その著作『経済学の常識』（一九一〇年）で、ウィックスティードは経済学において「経済人」というモデルを仮定することを批判したが、それは Political Economy and Psychology でも明確に示されている。『経済原論の「欲望」とか「価値」とかいう部分が面白く、その方面の学者になりたかった』という乱歩にとって、経済学における心理学の重要性を説くウィックスティードの主張は共感できるものであったのかもしれない。

*

「旧探偵小説時代は過去った」（『新青年』一九三二年二月）で、乱歩は自身を育んだ学問や文学の内容、そして自身が探偵小説を執筆するに至った経緯を明らかにしている。

私は大学の教室でアダムスミスの自由主義を基調とする経済学を学んだ。小説では旧ロシヤものの全盛時代に育った。日本の文壇では谷崎潤一郎が真面目な労作を発表していた。

子供の時分には、母親が愛読した関係で黒岩涙香を耽読した。英語の小説ではポオとドイル其他に親しんだ。

(中略)

私の学んだ、自由主義の経済学は、一個の「経済人」の心理解剖を事とする学問であった。愛読した旧ロシヤ小説は、申すまでもなく、個人の心の奥底をえぐる文学であった。日本でも、谷崎潤一郎氏は云うまでもなく、当時最も活動していた菊池寛氏にせよ、其他文学一般が、個人的であり、心理解剖を主とするものであった。文芸批評に『掘り下げる』という言葉が使われた。「深い」ということが第一の条件とされた。

しかしながら、「経済学と心理学との関係を論ず。」や他の「ECONOMICS」収録資料を確認した限り、むしろ乱歩は「経済人」に批判的な経済学を学び、研究していたこと

が分かる。単なる記憶違いによる誤記の可能性も否めないが、仮にこれが意図的な虚構であるとするならば、それはこの随筆の意図に由来するものと考えられる。

「旧探偵小説時代は過去った」において、乱歩は繰り返して自身を「旧人」「田舎者」と位置づけ、自身の心酔した「暗い人の心の奥底をえぐる、邪推深い探偵小説」が既に過去のものとなってしまったことを嘆き、現代に通用する「フランス・コント風」や「諧謔探偵小説」に対する不信を語っている。このような「時代」という観点から経済学に注目すると、随筆発表当時流行していた経済学として第一に挙げられるのがマルクス主義経済学である。大正末期から昭和初期にかけて流行を極めたマルクス主義は、経済学はもちろん当時の文学にも影響を与えていたことはよく知られている通りである。

乱歩は「経済学へノ関心」(『貼雑年譜』)で「私ノ時代はマルクス流行ヨリハ少シ早カッタ」と述べており、残された資料からもマルクス主義経済学にはあまり関心を示していなかった様子が伺えるが、マルクス主義経済学の流行は認識していたものと考えられる。そのような時代の流行であるマルクス主義経済学ではなく、自身は旧時代の自由主義の経済学を学んだとすることで、「旧人」「田舎者」とし

ての自身のイメージをより強固なものに構築しようとしたのであろう。「旧探偵小説時代は過去った」における「経済人」の記述は乱歩の記憶違いではなく、「旧人」「田舎者」としてのイメージを構築するための虚構であったと考えられる。

「活字と僕と——年少の読者に贈る——」（『現代』附録、一九三四年十月）で、「経済学も殊に経済原論の欲望論だとか価値論だとか、人間そのものの研究が僕にはひどく面白かった。社会学、社会心理学なども、経済学と結びついて僕をそそのかした」と述べているように、乱歩は経済学を発端に様々な学問を受容していった。「心理試験」（『新青年』一九二五年二月）に対する自作解説で「だいたい前からフロイドの精神分析学というものに注目して、これは何とか物になり相だと思っていた」と述べているが、心理学への関心を学生時代の経済学研究の中に既にうかがうことができるのは興味深い事実である。乱歩が経済学、ひいては探偵小説で本来成し遂げたかったことは、あるいは人間の心理を解き明かすことにあったのかもしれない。一九二五年七月、春陽堂から刊行された乱歩の処女小説集の題名は『心理試験』であった。

今回、資料の翻刻にあたり旧字体は新字体に統一してい

る。判読できなかつた文字は□□で示し、挿入部分は○で示しているが、乱歩が意図して削除したと思われる箇所については翻刻していない。

【注】

- 1 江戸川乱歩「私ノ学歴」（『貼雑年譜』）を確認したところ、正しくは二十三歳であると考えられる。
- 2 江戸川乱歩「活字と僕と——年少の読者に贈る——」（『現代』付録、一九三六年十月）
- 3 江戸川乱歩「経済学への関心」（『貼雑年譜』）。なお、ここで乱歩は「人間研究」という表現を用いているが、これはマーシャルの『経済学原理』における経済学の定義の引用であると考えられる。なお、『ECONOMICS』には、乱歩がマーシャルの著作の翻訳を試みた「マーシャル 経済原論の翻訳」が収録されている。
- 4 同、注3
- 5 青木日出夫「マクミラン」（『日本大百科全書』小学館。引用はジャパンナレッジによる。）
- 6 マーシャルも「経済人」に対し批判的な考えを示している（『経済学原理』）。

Psychic Economy 八七及八八頁参照) 一言一句の義
は、即ち経済学者は、心理学の原則を結論として建設
するに非ざるを、寧ろ材料として整理するに止まるべ
からざる也。これ、蓋し心理学の究明したる原
則を流用するにあらずらんか、経済学者は、其前提を
完全精密に知らんか爲め、自のり、心算を懸けて、心
理学の分野の研究の歩を進むべきの道を極めてせざるべ
からざるが爲め外ならず。
斯くの如く心理学の要素は材料として整理せざるべ
からざるに、猶且其の経済学に対する整理の度か、物

52
復の要素の上にあるとを否定し得るものにあらず。
ケアネスは、地代の法則を實証し、而して更に次の如く
主張せり (Cairnes の Logical Method of Political
Economy 第二版三七及三八頁、Keynes より引
用せられ且明白に承認せられたる八五頁を参照)
地代の法則を形成するに當り、學者が、地主及び當地
人の行為を支配するに當り、其の誘因を研究するに當り
、報酬漸減の法則を考慮するに當り、其の自然的傾向を究
明するに當り、経済学者は、自のり研究せんとす其の真の事

去れど経済学者が、職として、心理学の終局原理を組立つ
る事に従事するものに非ざるは、言を俟たずして明かな
り。例へば、意思の性質を研究し、又は理性に対する意志
の關係を決定せんとするが如き事を爲すものに非ざるが如
し。経済学者の法則は、『結局、心理学的基礎に因を發する
もの』なることは、最も明白なる真理であるが、(Keynes
の Scope and Method of

Political Economy 八七及八八頁参照) 言ふ所の義は、即ち
経済学者は、心理学の原則を結論として建設するにはあら
で、寧ろ材料として受理するに止まるものなる事にある
也。これ、若し心理学の究明したる原則を流用するにあ
らざらんか、経済学者は、其前提を完全精密に知らんが爲め、
自から、必要に応じて、心理学の分野の研究の歩を進むる
の繁を敢てせざるべからざるが爲に外ならず。

斯くの如く心理学的要素は材料として受理せらるゝに止ま
ると雖、猶且其の経済学に対する重要な度か、物質的要素
の上にあることを否定し得るものにあらず。ケアネスは、
地代の法則を實証し、而して更に次の如く主張せり、
(Cairnes の Logical Method of Political Economy 第二版三七
及三八頁。Keynes によりて引証せられ且明白に承認せら

を獨立して承認し得來りたる如き既存の心理學的の種
の物質的材料の兩者を、同様前提として研究の歩を
進むより先なる事は事望也。唯、異れる點は、一の材
料にして、一半は物質的、一半は心理的なる時、如
何なる場合と雖、學者の結論は結局全然心理的とな
りしと云ふ一事也。其故如何と云ふは、地代の法則の
より如何なるものありと問はず、夫は何等かの所有
權又は特權のよりして保護せられ、或る誘因よりして刺
戟せられ、又何れかの物質的事實並に法則の影響せら
れたる、人間の行為を支配するも原理の形成より外あり

むるか故也。即ち結局人類行為の法則を如何に、經
済学の諸法則は、物質的の非心理的なる事明し
、又如何に故に心理学は、経済学に対し、物質的科學
又は工芸学等より以上深く關係を有するものと云
ひ得べき也。
故に即ち経済学者自からは、心理学的材料の終局的解
明を為すより先なる事は、如何に結論せしむるは、心
理的現象の組合せより成るものと云ふ事明白なりと云ふ
べし。予は言へ、右の範圍内を終了し、學者は、異れる
主張を為すより先なる地代より論ぜり。経済学者は

れたる八五頁を参照)

地代の法則を形成するに当り、學者が、地主及び借地人の
行為を支配すべき利己心の誘因を研究する事は、報酬漸
減の法則を決定すべき土地の物質的性質を究明するの仕事
に、越ゆることなしと。
然り、経済学者は、自から究明せずとも其の真なる事を満
足して承認し得來りたるが如き既存の心理學的並に物質的
材料の兩者を、同様前提として研究の歩を進むるものな
る事は事實也。唯、異れる點は、一の材料にして、一半は
物質的、一半は心理的なる時は、如何なる場合と雖、學者
の結論は結局全然心理的となるべしと云ふ一事也。其故如
何とならば、地代の法則なるものが何様のものたるを問は
ず、夫は何等かの所有權又は特權によりて保護せられ、或
る誘因によりて刺戟せられ、又何れかの物質的事實並に法
則に影響せられたる、人間の行為を支配すべき原理の形成
に外ならざるが故也。即ち結局人類行為の法則なるが故
に、経済学の諸法則は、物質的に非心理的なる事明にし
て、又かるが故に心理学は、経済学に対し、物質的科學又
は工芸学等よりも以上に深く關係を有するものと言ひ得べ
き也。
故に即ち経済学者自からは、心理学的材料の終局的解明を

心理學的材料と物質的材料とを同様にして研究し、一般的研究の方法(即ち、帰納法演繹法又は數學的論法を適用する事)を以て是を取扱はるべきなり。而して其心理學的結果を、社會學者より採集するものありと宜し得べく、或は又經濟學者は、大部分、否否殆んど一般に、應用心理學にして、經濟學者は、終始自から心理學的現象を取扱へる事を自覺し、凡て心理學的研究より指導せられざるべからざる程也とも宜し得べきなり。此の場合、心理學が經濟學に對する關係の密接なる、恰も、數學の工學に對するが如し。

し。但し凡この方面に於て皆之を類似せりとばさば不可。消費論なる項目を、經濟學より獨立して助ふるべき一項目と爲すべしや、又は是を廢すべしやは、實際此の關係(經濟學と心理學との關係の問題)より産れ出たるものありと略やすきの理あり。消費論の理論的研究は、満足に關する報酬の漸減(効用漸減)接合せば、同一目的物に供給せらるる貨物又は勤勞の絶えざる増大に對する安心の念と云ふ、一大心理學的原則の應用論として、此れを外にしては何物もなし。是れ故に經濟學の一部としてこの消費論を許容するは、取ら

為すものに非ざれど、彼が結論そのものは、心理的現象の組合せより成るものなる事明白なりと云ふべし。さは言へ、右の範圍内に於て、學者各々異なる主張を爲すに充分の余地あるは勿論なり。經濟學者は心理學的材料と物質的材料とを同様に受け入れて研究し、一般的弁化の方法(即ち、帰納法演繹法又は數學的論法を適所に用ふる事)を以て是を取扱はざるべからず、而して其心理學的結果を、社會學者に提供するものなりと言ひ得べく、或は又經濟學は、大部分、否否殆んど一般に、應用心理學にして、經濟學者は、終始自から心理學的現象を取扱へる事を自覺し、凡て心理學的研究によりて指導せられざるべからざる程也とも言ひ得るなり。此の場合、心理學が經濟學に對する關係の密接なる、恰も、數學の工學に對するが如し。但し凡ての方面に於て皆之に類似せりとば言はず。消費論なる項目を、經濟學の獨立にして明白なる一部分と爲すべきや、又は是を廢すべきやは、實際此の問題(經濟學と心理學との關係の問題)より産れ出たるものなること略やすきの理なり。消費論の理論的研究は凡て、満足に關する報酬の漸減(効用漸減)換言せば、同一目的物に供給せらるる貨物又は勤勞の絶えざる増大に對する安心の念と云ふ、一大心理學的原則の應用論にして、此れを外にしては何物もな

力直す不應用心理学が、経済学中重要な地位を占むることを許容する所以にして、今、既に『消費論』の独立的な研究が、経済学の範圍内に属する事を許容せられ居るものと云ひ得べくんば、必然の筋路として、吾人は心理学的材料及判断のみにならず、同様に又心理学の理論も、経済学の一部として許容せざるを得ず。而して、消費論を明白に区分して論ずること、並に経済学中消費論の部分が依りて存する所以の心理〔学〕的現象の重要なべき事〔一〕は、最も通俗〔なる〕代表〔的〕誤謬論によりてすらも、克く明瞭なるを得也。一例を引けば、數

十年前の最も卑近なる経済学應用の好適例として、之れを勝るものあるを思はざらんと思はざらん、即ち國民の不足は彼等自から償ふべし故に凡ての保護制度は努力の浪費に過ぎず、且つ『國民經濟の敵也』と云ふが如きものを得んが為、同価値の物を与へんことを望めるが常なるものなり。この事実より、市価に対する結論、努力及び財産の商業的に有利なる処理に対する結論等、若干の結論を引出し得べし。之等結論を転換せば、更に次の結論を引出し得べし。之等結論を転換せば、更に次

し。それ故経済学の一部として『消費論』を許容するは、取りも直さず応用心理学が、経済学中重要な地位を占むることを許容する所以にして、今、既に『消費論』の独立的な研究が、経済学の範圍内に属する事を許容せられ居るものと云ひ得べくんば、必然の筋路として、吾人は心理学的材料及判断のみにならず、同様に又心理学の理論をも経済学の一部として許容せる事となる也。而して、消費論を明白に区分して論ずること、並に経済学中消費論の部分が依りて存する所以の心理〔学〕的現象の重要なべき事〔一〕は、最も通俗〔なる〕代表〔的〕誤謬論によりてすらも、克く明瞭なるを得る也。一例を引けば、数十年前の最も卑近なる経済学應用の好適例としては、之れに勝るものなからんと思はるゝ格言的文句、即ち『國民の不足は彼等自から償ふべし』故に凡ての保護制度は努力の浪費に過ぎず、且つ『國民經濟の敵也』と云ふが如きものを得んが為、同価値の物を与へんことを望めるが常なるものなり。この事実より、市価に対する結論、努力及び財産の商業的に有利なる処理に対する結論等、若干の結論を引出し得べし。之等結論を転換せば、更に次の如く記述することを得、即ち二者の中、一人は同

の如く記述することを得、即ち二看の甲、一人は同價
のものを與へては甲を得ん事を望まず、他の一人は
同價のものを與へて乙を得んことを望むる場合なり
とせば、前者の甲を慾する度、後者の乙を望むる度
なり、この場合、後者を措て、先づ前者に甲を給するは、
無駄にして誤れるの恩慶たるなり。如何なる經濟學者と
雖、かゝる誤謬を正しき理論なりと主張すること無きは勿
論なれども、然共、若し斯學者にして、消費論を論ぜず、
心理学的研究を除外せんか彼は自から此の如き『誤れる応
用』に陥り易からしむるものと言ふべく、更らに極言せば
是を招くものなりとさへ言ひ得る也。

予もさと言ふべく、更ら極言せば是を招くものなり
と云ひ得る也。
消費論は予付きては以上の如し、次に交換論は、満
足と甚だ密接の關係を有し、又價値の法則も教つて
は、満足の報酬漸減なる心理学的法則加せうて極めて
重要を為し、今日もては既に、價値並に交換の問題よ
り、應用心理学を除外すること全く不可能となれる程
なり。
通貨と關する諸問題は、この説明を對し最も恰なる材
料を供給す。經濟學中貨幣及び外國貿易の如き

価のものを与へては甲を得ん事を望まず、他の一人は同
価のものを与へても乙を得んことを慾する場合に於ては、
前者の甲を慾する度、後者の乙を望むの度に劣れることと
なり、この場合、後者を措て、先づ前者に甲を給すること
無駄にして誤れるの恩慶たるなり。如何なる經濟學者と
雖、かゝる誤謬を正しき理論なりと主張すること無きは勿
論なれども、然共、若し斯學者にして、消費論を論ぜず、
心理学的研究を除外せんか彼は自から此の如き『誤れる応
用』に陥り易からしむるものと言ふべく、更らに極言せば
是を招くものなりとさへ言ひ得る也。

『消費論』に付きては以上の如し。次に交換論は、消費論
と甚だ密接の關係を有し、又價値の法則に到つては、満足
の報酬漸減なる心理学的法則が与つて極めて重要を為し、
今日にては既に、價値並に交換の問題より、應用心理学を
除外すること全く不可能となれる程なり。

通貨に関する諸問題は、この説明に對し最も恰なる材料
を供給す。經濟學中貨幣及び外國貿易に關する部分程、自
然現象（心理現象に對し）の客觀論（主觀的論法即ち心理
的論法に對し）的なるは無き様に思はる。而して所謂
數量説の如きに至つては、心理学的ならざる經濟原則の実
例として数々提供せらるゝ処のもの也。一見、心理学的な

部の程自覚現象(心理現象を評し)の客観論(主観的論
比即ち心理的論法を評し)的なるは無き様を見ざる。而
して所環數管理の如きに至つては、心理學的なるある
經濟原則の实例として數々提擧せらるゝ處の如き也。
一見、心理學的なる如き事めく如き問題に於てすら
も、實際は、夫として全然然るも亦ある不。此等者
全研究を通じて其心理學的基礎を自覺し、是を接觸し
つゝあるに及らざれば、貨幣論中、如何なる評かと云
安全を論究するに能はざる也。吾人は東洋需要供給の
一般原則に依りて、國に金貨多しれば多き程、其兌換

價值は低下するものなりと云ふ如き明白の議論(一
も、特殊の試験を経ずしては為す事能はず。夫は、此
の論證を供給の一般原則中にも、心理学に關聯せし
ものなりを除外するものなり。何故に供給の増大は、
その交換價值を低下せしむるや。曰く、或る貨物の需
給増大する時は、同貨物に対する慾望を以前よりは充分
に満足せしむるを得、隨つて、満了したと願ひて滿
足はする慾望の量をも減少せしむる事と云ふの如きなり。
今貨幣に付きて言はん、廣き範圍に於ては、貨幣の
數加えたるも或は又の几倍なりとも、其作用を為す

らざる事かくの如き問題に於てすらも、實際は、決して全
然然るものにはあらず。学者が全研究を通じて其心理學的
基礎を自覺し、是に接觸しつゝあるにあらざれば、貨幣論
中、如何なる部分と雖安全に論究すること能はざる也。吾
人は需要供給の一派原則に依りて、國に金貨多ければ多き
程、其交換價值は低下するものなりといふが如き明白の議
論さへも、特殊の試験を経ずしては為す事能はず。夫は、
此の需要供給の一般原則中にも、心理学に關連せるものあ
るが為に外ならざるなり。何故に供給の増大は、その交換
價值を低下せしむるや。曰く、或る貨物の供給増大する時
は、同貨物に對「す」る慾望を以前よりは充分に満足せし
むるを得、隨つて、満了したと願ふて満足せざる慾望の
量をも減少せしむる事となるか為なり。全貨幣に付きて言
はんに、廣き範圍に於ては、貨幣の數が x なりとも或は x
の n 倍なりとも、其作用を為す上に於て些の変化を束さざ
るものなり、それが故に、世に貨幣の作用の杜絶する事な
く、且つ貨幣に對する慾望を満了したとの念は、金貨の數
の増大と共に減少するものなり。但しこは一般の貨物皆然
りと云ふに非ず。事既に斯の如し、若し需給の原則にして、
絶対的に客観論として取扱はれ、その心理学に關係せる事
を等閑に附せられんか、該原則を貨幣問題に適用せん事

此を考へて其の變化を来すや、他も亦有り、其の如く或は、
 世は貨幣の作用を社絶する事なく、且つ貨幣を對する
 慾望を滿したしとの名は、金貨の數の増大と對し減
 せずとも有り。但し之は一般の貨物皆然りとす、
 必ずしも事既す斯の如し、若し習俗の原則として、絶對
 的の勞働論として取扱はれ、その心理學を關聯せざる事
 を望むべし、然るに、後章則は貨幣問題と關聯せん
 事は、理論上全く無價值のものとなり了らんのみ。
 又吾人は、生産論及び分配論を對して、
 ありんとす。生産論の研究は、勞働の理論を處理する

勿論あるが、其の勞働論あるものは、凡ての部分を於
 て、努力の不斷の増大を對する苦痛漸増の法則、及び
 貨物又は努力の他の結果の不斷の増大を對する心理學
 的(主觀的)價值漸減の法則を負ふ所甚だ多きものあり。
 而して後述の如く、生産要素中、他のものは元の儘な
 るに或る一要素のみ絶えず増大する事あり、生ずる報酬
 漸減とあり、よく知られる如く、物價の法則と相提携し
 て、分配論の凡ての真を支配するものあり。
 以上述べて來りたる所より、吾人は經濟學の四大部分
 (生産、分配、交換、消費)の凡てを於て、最近經濟學研究

は、理論上全く無價值のものとなり了らんのみ。

次に吾人は、生産論及び分配論に付いて少しく言ふ所あら
 んとす。『生産論』の研究は、勞働の理論を含む事勿論なる
 が、其の勞働論なるものは、凡ての部分に於て、努力の不
 斷の増大に対する苦痛漸増の法則、及び貨物又は努力の他
 の結果の不斷の増大に対する心理學的(主觀的)價值漸減
 の法則に負ふ所甚だ多きものなり。而して該法則は又、生
 産要素中、他のものは元の儘なるに或る一要素のみ絶えず
 増大する事より生ずる報酬漸減といふ、よく知られたる、
 物價の法則と相提携して、分配論の凡ての点を支配するも
 のなり。

以上述べ來りたる所により、吾人は經濟學の四大部分(生
 産、分配、交換、消費)の凡てに於て、最近經濟學研究の
 方針は、心理学對經濟學の密接なる關係と、並に經濟學中、
 最も心理学より遠かれりと思はるゝ研究に於てすらも、常
 に心理學的基礎に接觸を保つの必要とを、明白強烈に認識
 するの傾向を帯び來れることを了解せり。

然れども特に『生産論』及『分配論』に關しては、問題の
 更に異りたる局面に注目すべきものあり、今是に付きて一
 言せん。吾人は已に經濟學の心理學的材が、専ら結果と
 して受入れられ、一般的弁化の方法によりて取扱はる可き

の方針は、心理学と経済学の密接なる関係と、並に経済学中、最も心理学より派生し得ると思はるる研究に於てなり、亦、心理学の基礎を揺動を爲すの必要とを、明白強烈に認識するの傾向を帯び来れりとのを了りし。

然れども特に生産論及分配論に於ては、問題の更なる研究の方面に注目すべきあり、今は是を一言せん。吾人は已に経済学の心理学的材料が、専ら結果として導入せられ、一般の諸地の方法によりて取扱はるべきなり、又、夫は、研究を際して特定の

問題の心理学的状态を應用する為の常態的關係、即ち原則としてのみ取扱はるべきなり、或は、今更に進んでその事實たるを原則たるを向はば、是等心理学的材料は實際に於て、富の生産分配其他の多かるべき心理学的研究の凡そを含むものなり、或は、将た又、吾人は経済学に於ける心理学を、人間的に制限して、仮想的なりと經濟人口を刺戟せしむると思はせらるる誘因に付てのみ論ずることを為すべきなり、或は、後者を採らんか、前者を採らんか、前者を採る時は實際

や、又、夫は、研究に際して特定の問題の心理学的状态を應用する為の常態的關係、即ち原則としてのみ取扱はるべきものなりやに付き論述したれば、今は更に進んでその事実たると原則たるを問はず、是等心理学的材料は實際に於て、富の生産分配其他にあづかるべき心理学的研究の凡そを含むものなりや、將た又、吾人は経済学に於ける心理学を、人為(的)に制限して、仮想的なる「経済人」を刺戟すべしと想像せらるる誘因に付てのみ論ずることと為すべきやを考究せざるべからず。後者を採らんか、経済学は一個の仮想的科学となり了るべく、前者を採用する時は實際を的とする、真面目の科学となるべし。

茲に於てか最近経済学研究は、夫より経済学の材料の引出さるべき心理学の領分を、拡大するの方針に傾ける事を疑ふべからざるは、更に明白となれり。此傾向は近世経済学研究に於ける二個の代表的主義を観察せば明白なるを得るなり。而して該二主義は、経済学研究上互に相反目せるものなり。第一に、経済学研究の分野も亦他の学問に於けると同じく、研究の固定的論法に對する熱心の為に、其議論発表の當時に於て、或は遠く隔りたる時代に於て、害せられたる事少なからず。今、歐洲又はアメリカに於ける大ストライキ或は産業運動、印度に於ける土地享有或は村落

を酌とす。直に面目的科學と云ふべし。
茲に於ては最近經濟學研究は、其れ夫より經濟學の材
料の引おき、マキ心理學の類を、據てオミテ、方針
を傾け、近世經濟學研究を於ける二個の代表的主義を
觀察せば、明白なるを得あり。而して茲に主義は、經
濟學研究上互に相及せしむるものあり。第一は、經濟學
研究の分野も其他の學問に於けると同じく、研究の
固定的論法を於ける熱心が、其後論争表の當時に
於て、或は遠く隔りたる時代を於て、實せられたる事

其れを知らず。今、歐洲又はアメリカに於ける尤もト
引く或は産業運動、印度に於ける土地所有或は村落產
業、イギリス又はフランスに於ける中流階級本位の予
算或は職工本位の予算、ハンザ市又はイタリー若し
に於ける産業の發達及組織、商業上の關係を有する國
民の財政制度等の正史を編くも、富の生産分配
に關する此類の學問の思ひあはし、然るも、是等は
實に、經濟學中の心理學を制限せし、リカルド及セニ
オールの説の勢力全く不充分なりし地方に於たりたる
事と云ふべし。右派に於て第一の主義、即ち産業的

産業、イギリス又はフランスに於ける中流階級本位の予算
或は職工本位の予算、ハンザ市又はイタリー共和国に於け
る産業の發達及組織。商業上の關係を有する國民の財政制
度等の歴史を編くものは、富の生産分配に關する状態を學
べるの思ひあるべし、然るに、是等は實に、經濟學中の心
理學を制限せし、リカルド及セニオールの説の勢力全く不充
分なりし地方に起りたる出来事にてあるなり。右述べたる
第一の主義（即ち固定的論法）の誤れることは甚だ明白に
して、一派の經濟學者は、經濟の一般理論或は學といふが
如きものはあり得ず、只、富、生産等の自然歴史あるのみ
といふ説を、許容せんとさへする「も」の如し。同時に
又他の一派は、經濟の一般的理論を、より広く、より一般
的に適用し得る原則の上に、再び建設せん事を企て居れ
り。是れ即ち近世に於ける第二の主張が、歴史的論法と相
併びて起れる事を云ふ也。此の第二の主張は、時に数学的
論法とも称せられ、其独特の点より、歴史的又は固定的論
法の補充として有要なり。その理由はは次の一事を以て明
かなるべし。数学的研究家は、広く認められたる經濟學の
心理學的材料を、彼の論法に隨つて厳正にして同時に統一
的なる形式に導くや否や、必ず、彼は自れの法式が實際に、
その手段及びその結果と等しくその性質にも關係なく、只

(固定の論法) の漢れること甚だ明白にして、一派の
 経済学者は、経済の一般理論或は學としかかぬ事との
 はあり得ず、只、富、生産等の自然歴史よりうかとい
 心説を、詳密せんとす(すまひ、也)。同時に又他の
 一派は、経済學の一般の理論を、より高く、より一般
 的の適用し得る原則の上よ、再び建設せん事を定めて居
 此り。是れ即ち近世の形に於ての歴史が、正史的論
 法と相併して起るべき事也。此の形にの基礎は、正史
 的又は形史的論法と稱せられ、其批評の真なり、正史
 的又は形史的論法の補充として有要あり。その理由は

は次の一事を以て明かすべし。数学的研究は、尤
 く認められたる経済学の心理学的材料を、彼の論法に
 随つて蔽ひあして同時上統一的な形式を導くや否や
 必らず、彼は自らの法式が空疎な、その手段及びその結
 果と等しくその性質も同様に、只結果を最大ならし
 しめんとする目的のみにては、財物分配の一般理論
 に一致するものあり事なき也。これよりして、
 人間の経済行為は、彼の一般行為と同様の法則の下
 に指導され、且つ吾人は吾人のためつゝあり、より
 廣き基礎を與へらるゝの曙光を認むる事を得る也。

「望ましき」結果を最大ならしめんとする目的に關しては、
 財物分配の一般理論に一致するものなる事を了知する
 也。これによりて、人間の経済行為は、彼の一般行為と同
 様の法則の下に持來たされ、且つ吾人は吾人の求めつゝあ
 る、より廣き基礎を與へらるゝの曙光を認むる事を得たる
 也。

××××××××××

吾人の結論は、彼の議論批評のみ多くして、その実績に
 至つては殆んど了解され居らざるオーギストコント
 (Auguste Comte の Philosophie Positive, Cours de, par Littré,
 第四卷、百九十三頁及以下参照) の主張に絶好の光明を
 与えたり。即ち、特別に個有の法則と原理とを有する富の
 学問なるものはあり得べからざる事、単独の中に於ける人
 間を支配する財物獲得の誘因に付きて論ずるは實際に於て
 無益たるべき事、されど学問の一般原理を、産業生活、商
 業生活等に対して特殊的に応用する事は、最も有益にして
 価値あるべき事、是也。——完——

右の一編は、Palgrave の Dictionary of Political Economy

